

世界災害救急医学会トロント 2017 に参加しました (2017/4/25-28)

テーマ： 世界中の病院前、救急医療、公衆衛生、災害医療と備えを強化する。
会場：ウェスティン ハーバー キャッスル ホテル (トロント)

2017年4月25日(火)-28日(金)にカナダ トロントで開催された世界災害救急医学会トロント2017に江川新一教授(災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野)が参加しました。

World Association for Disaster and Emergency Medicine (WADEM)は世界中で多発するすべての災害に関与する保健医療クラスターを中心に、災害救急医療にかかわる構成員の教育と学術、交流を目的として2年ごとに開催されています。歴史は1976年の第1回に始まり、トロント2017は第21回目にあたります。世界60か国以上から900名を超える参加があり、災害救急医療の新たな側面として、薬剤師の役割、状況把握、獣医師の役割と動物の健康、フランス語セッション、救急部の過剰需要対応、ケアへのアクセス、緊急放射線診断などの新たな分野も加えられました。また、WHO、米国国立医学図書館、Evidence Aid、南アフリカ救急医学会、中国救急医学会、エジンバラ医学会などが参加し、国連や各国政府との連携にも貢献しています。

江川新一教授はシミュレーションのセッションで講演し、災害前から存在する医療ニーズ、発災から時間経過に伴って変化する医療ニーズを再現できるシステムダイナミクスシミュレーションのモデルを提示しました。国際赤十字赤新月連盟のJulie Hall理事長も災害後に変化する医療ニーズへの対応を呼びかけた直後でもあり、江川新一教授の発表は高い関心を得ました。

江川新一教授は日本集団災害医学会および災害科学アカデミアの一員として、WADEMがWHO、各国の災害医学会、軍関係者、国境なき医師団、赤十字などの非政府組織、アカデミアなどの代表者を集めて開催したコンセンサスミーティングに参加し、災害保健医療対応者のメンタルヘルスクエア、文民と軍の協働などに関して共通認識を持つための議論を行いました。

WADEMは2年に1回開催され、さまざまなテーマに沿って発表と議論がなされます。カナダは英語とフランス語が公用語でもあるため、フランス語だけのセッションも開催され、地元からの参加者が多くなる工夫がなされていました。災害医療を経験にとどまらせるのではなく、エビデンスに基づく実践にするためには、エビデンスを構築できるような研究と成果の発信が求められます。防災の他のクラスターとの協力協働も大変重要な課題です。

WADEMはすべてのハザードに対応する能力の強化を目指しています。自然災害、生物学的、化学的、核・放射線、爆発など近年ますます複雑化する災害に対して効果的に対応し、被害を最小限にとどめるために保健医療がどのような備えをするべきかが議論されています。テロや銃乱射などあまり身近ではなくてもいつ起こりうるかもしれない災害に備えること、さらに、そのような災害が起きないようにするためには何が必要なのかを含めて防災になります。

仙台防災枠組は災害救急医療のなかでも多く取り上げられるようになりました。仙台から来たというだけで、目を輝かせてもらえます。次回の2019年はオーストラリアのブリスベンで開催されます。まだ確定ではありませんが、2021年に東京で開催される可能性もあります。仙台防災枠組が締結されてからすでに2年が経過し、5月にメキシコのカンクーンで開催される防災プラットフォームにはWADEMの理事長も参加し、人々の健康(身体的、精神的、社会的に良好な状態であること)を中心にした防災について発信する予定です。災害医学研究部門をもつ東北大学災害科学国際研究所がどのように貢献できるかが期待されています。



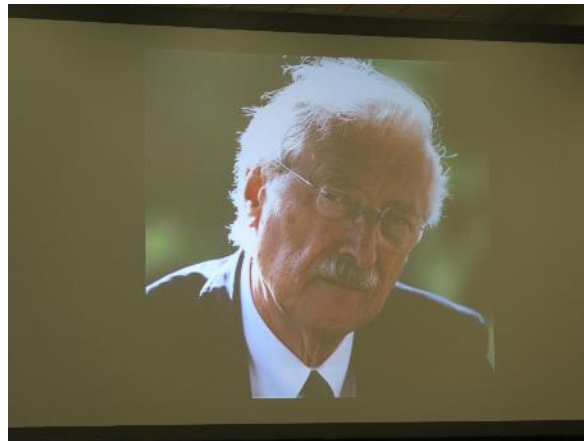
仙台防災枠組の実現にむけた WHO と
 WADEM のパネル



熱心に聴講する 60 か国 900 名以上の参加者



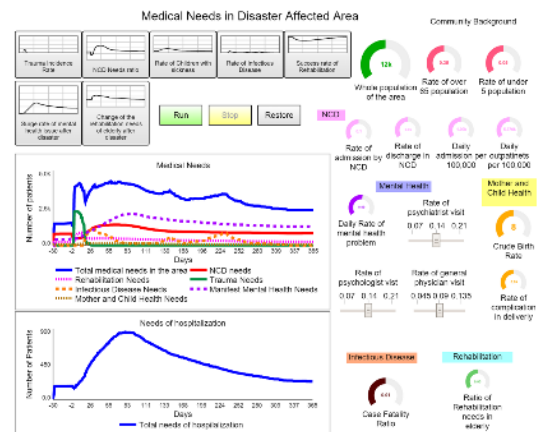
WADEM への貢献に対して会長賞を授与される
 WHO の Jonathan Abrahams



災害医療に関する多大な貢献をなした
 Frederick “Skip” Burkle 賞が創設された



巨大災害後の保健医療ニーズの推移について
 説明する国際赤十字赤新月連盟の Dr. Julie Hall



江川新一教授の開発した医療ニーズシミュレーションはさまざまな医療ニーズから構成される
 発災前から長期経過後までを再現